[とよなか山田会ニュースレター]
文化と芸術を愛する人びとの集い
2023.4.1 6

豊中市名誉市民・映画監督

山田洋次氏にエールを送る

●編集・発行／とよなか山田会　●代表／武市　進　●〒561-0894　豊中市勝部1-1-7　TEL／080-3868-2010
●facebook／toyonakayamadakai.com　●メール／info@toyonakayamadakai.com

●2016年　豊中市名誉市民授賞式　右／山田洋次監督　左／淺利敬一郎　前・豊中市長

本紙「とよなか山田会ニュースレター」は、これまで、2017年6月の準備号、2017年12月号、2018年6月号、2019年1月号、2020年1月号、2021年9月号と5号を刊行し、豊中市名誉市民・映画監督山田洋次氏の業績を称え、一層のご活躍を祈って、ご発言や数々の作品と行事をお知らせしてきました。

しばらく休刊しておりましたが、このたび、「文化と芸術を愛する人びとの集い　山田洋次氏にエールを送る」と少し内容を広げ、山田作品とともに、多方面にわたって文化・芸術の情報を取り上げる文化紙として、再刊することにいたしました。

ゲンキあふれるみなさまのご投稿を得て、ささやかながら独特の魅力を持つ情報紙として本紙が成長することを祈ってやみません。ご投稿をお待ちしています。

とよなか山田会　　代表　武市　進

山田洋次監督の映画を観る①

元・豊中市副市長　NPO政策研究所理事
田中逸郎

これまで「逸郎の映画三昧」と称し、「とよなか山田会」や「とよなかの星たち」（地域ミニコミ紙）などに映画評だかなんだかよくわからない雑文を寄稿してきた。そんなご縁からか大病を克服した西井弘和さんから、豊中市名誉市民山田洋次さんへのオマージュを書け……しかも年4回発行予定なので連載も視野に入れて、というご沙汰である。連載は厳しい、荷が重すぎる、さてどうするか……。悩んだ末に、初回は予告編として、名誉市民となって頂いた際の裏話のようなエピソード、そして山田監督のメッセージを紹介しよう。西井さんのムチャぶり、これにはお茶を濁すしか術がない。ご容赦を。

『家族』(1970)

観客の胸の中に熾（おき）、つまり火の消えかけた炭がある。僕たちの仕事は、その熾にもう一回火をつけること（山田監督の言葉より）。

まずは思い出話から。

１９８２年、映画好きの豊中市職員が集まり、山田監督を市民会館（現・文化芸術センター）に招き、講演と映画上映を行った。上映した作品は『家族』（１９７０年）。九州の閉山となる炭鉱から北海道へと移住する一家が隠し撮りと思われる大阪万博のシーンをはじめ、高度成長期の変わりゆく社会と世相に翻弄される姿を描いたロードムービーである。庶民の暮らしから日本をあぶりだした名作に僕たちは感動し、無謀にも？山田監督にオファーし、ご快諾いただいたのである。天にも昇る気持ちで、仕事そっちのけでポスターをつくり、チケットを販売。沢山の観客が集まった。終了後の懇親会では、「寅さんをぜひ千里ニュータウンに、団地の若奥様との恋を」などと無茶ぶりの提案をした仲間もいた。山田監督は始終笑顔だった。なつかしい想い出である。

このぼくたちの自主上映会に監督が来られたのには、実は訳がある。

その時には知らなかったある理由があった（２０１６年、豊中市名誉市民になられた際に僕に打ち明けてくれた）。ご自身の生家、そう、あの『小さいおうち』（２０１４年）のモデルとなった豊中市岡町の赤い屋根の家が記憶に刷り込まれていたからである。映画誌掲載の山田監督年譜では「宝塚市岡町生まれ」と誤記されていて、当時、豊中ご出身ということも、生家があるということも誰も知らな

『小さいおうち』(2014)

かった。

こんなきっかけ・エピソードがあり、名誉市民になられた。おかげで僕たちは今、豊中で新作の先行上映をしていただき、鑑賞できているのである。

このエピソードから思うことがある。創作者は長く深くいろんな体験や記憶、出来事を寝かせ、組み合わせ、熟成させて作品へと結実させる。

まるで酒造りのよう、うまく熟成せず、腐敗してやむなく流すことも多いだろう。創作者の、いわば「長距離ランナーの孤独」（アラン・シリトー）と「持続する志」（大江健三郎）には頭が下がるとしか言いようがない。と同時に、僕たち鑑賞者の言動も、ほんの少しかもしれないが、創作活動の一助となっているのではないか。そう思いたい。

『小さいおうち』のモデルとなった山田監督のご生家

豊中市桜塚に現存する山田氏のご生家。1931 年生の氏が2歳まで住んでおられたから恐らく20 年代後半の建築だろう。当時は豊中町の時代で、市役所も岡町図書館もない。岡町駅と原田神社、そして能勢街道と伊丹街道の交わる「町場」だった岡町の市場があった。

当時、阪急が開発していた豊中・岡町・曽根一帯の分譲住宅群の一画に、これだけ仰角の深い赤屋根のモダン住宅を建てたお父上は、相当の豪傑だったと思われ、大工さんもよく引き受けたものと感心する。モデルハウスの一つだったかもしれない。以後東京へ転居、そして父上が南満州鉄道にご勤務だったので満州へ。引き揚げとその後のご苦労は大変だった。築後90年を越えたこの家に現在お住まいの方も、よほど丁寧に維持に気遣いながら住んでおられるに違いない。（編集部）

映画館に足を運ぶ、文学書を読む、美術展やコンサートへ行く、そして自らの人生をかみしめる様に振り返り、引き受けて生きていく。

こうした鑑賞者の有り様に触発されて、創作者は孤独に耐え、志を持続させているのではないか。山田監督は、新作上映の際には一人で映画館に足を運ぶという。

観客の反応こそが創作のエネルギー、時には思わぬ（意図せぬ）発見もあるとか。

表現とは、送り手と受け手の協働化作業であり、その発露・結晶なのかもしれない。

寅さんがそうだ。でないと、ただ出来事や世相を切り取って「つらい」だけ、生きる喜びや哀感にまで高めることはできないだろう。この小冊子の発刊が、そして「とよなか山田会」の活動が、こうした一翼を担うことに役立つことを願ってやまない。

さて。次回以降の連載に向けて、山田監督のメッセージを記しておく。

「観客の胸の中に熾（おき）、つまり火の消えた炭がある。僕たちの仕事は、その熾にもう一回火をつけること。温かいものがしばらく、うちに帰るまで残っている。そんな映画ができたらいいなって」（豊中市先行上映会『キネマの神様』にて、２０２１年７月９日朝日新聞夕刊より）

僕たちの中にあり、忘れかけている熾。

それは何か。山田監督はなぜ、笑いを通して、庶民の暮らしを通して、時代劇を通して、暖かいものを送り続けているのか。感動を分かち合いながら、これから一緒に振り返ってみたい。それが、ある種の映画評になることを願いつつ。

『キネマの神様』（2021）

筆者　田中逸郎さん

在パリ　クロード・ルブラン（Claude　Leblanc）

山田洋次監督の「ふるさとの概念」について

「本当の意味での故郷というのはないんです。今でも、帰る場所がある人はちょっとうらやましいですね」

山田監督と

クロード・ルブラン氏

1964 年パリ郊外生まれ。ジャーナリスト、作家、大学講師。ル・モンド・ディプロマティーク紙の日本特派員として、1990～93 年まで横浜に滞在。帰国後、週刊誌クーリエ・アンテルナショナルで日本関連の記事を担当し、2005 年編集長に就任。2011 年にジュヌ・アフリク誌編集長。2013 年全国紙ロピニオンの創刊とともにアジア報道部長に就任。「Le Japon vu par Yamada Yoji(山田洋次が見た日本)」の他に、「Le Japoscope」など著書多数。

日本との距離が縮まったのは、高校生のときに始めた文通がきっかけ。文通相手に「遊びにおいで」と誘われ、未知の国に飛び立った。何もかもが刺激的だった2ヶ月間に、20 歳のフランス人青年の心をつかんだのは「寅さん」。スクリーンいっぱいに溢れる人々の喜怒哀楽と「等身大の日本社会」を描いた作品が頭から離れなかった。この時に買った山田洋次監督のエッセイ本『映画館がはねて』(講談社)は、今でもクロードさんの心のバイブルだ。

とよなか山田会から「会報に文章を書いてほしい」という連絡を受けたとき、「山田作品はフランスで７５０ページの本を出版してしまうほど素晴らしいので、どんなテーマを取り上げればいいのだろう」と考えました。ここで、会代表に「何か取り上げてほしいテーマがありますか」と伺いました。山田監督の主人公である寅さんがフランスでどう受け止められているか、あるいは、山田監督が国際的に知られるようになったのは、「たそがれ清兵衛」をはじめとする３本の時代劇映画のシリーズがきっかけではないか、などの意見が出されました。

あれこれ迷った末、最後に、ご要望に申し訳ないのですが、私は「ふるさと」という概念について書くことにしました。

このテーマは、山田監督にとって非常に繊細なテーマであるため、ほとんどの作品において重要な位置を占めています。

山田洋次は１９３１年９月１３日、大阪府豊中市で産声をあげました。自身、繰り返し言及していますが、それは満州南部で起きる柳条湖事件の５日前のことでした。この事件は、日本が１９４５年に敗北して終わる戦争へのはじまりとなる出来事でした。

そのことによって、何百万人もの人々と同様、人生がその歴史的な出来事によって大きく影響されたのだということを浮き彫りにするのです。彼の場合、その生まれた時代がもたらしたのはデラシネ（根無し草）ということでしょう。

つまり、出身地あるいは「ふるさと」の欠如です。「ふるさと」は日本人のアイデンティティを形づくる要素と言えます。だれもが自分が生まれ、家族が暮らす地方にとても強いつながりを感じています。

古代ギリシャの哲学者、ディオゲネスについての著作の中で、ジャン＝マニュエル・ルビノは「エウリピデスの言葉を借りるならば、先祖代々の地を自分の居所にできないということは、永遠にふさがれることのない傷、強い苦悩となる」と語っています。

スイカと兵隊の曖昧な記憶はあるものの、特に両親が豊中出身ではないため、豊中市とのつながりも弱い。２０１６年10月15日、「奇跡的に原型をとどめている」自分の生家について、「家族の原型が確かにそこにある」豊中市名誉市民になった、とそのとき彼は言いました。しかし、その小さな町とのつながりは、父の郷である柳川とのつながりと同様に、今も希薄なままです。満州へ旅立つ前に、父が家族を連れて九州へ行き、先祖の墓にお参りすることにしたのは、そのためでしょうか。

しかし、この短い滞在は、作者が同時代の多くの人々

と同じように「ふるさと」の存在を呼び起こすのに十分なほど強力な結びつきを生み出すような性質のものでありません。

「私は大阪で生まれましたが、幼い頃に一家で満州に移住しました。戦後は山口県で青春時代を過ごしました。中国にいたときも、日本に帰ってきたときも、場所を変えながら生活していたので、本当の意味での故郷というのはないんです。子どもの頃、夏休みを祖父母のもとで過ごせる友だちがうらやましかった。今でも、帰る場所がある人はちょっとうらやましいですね」と、自分のルーツについて聞かれると、よくまとめていました。日本人で唯一、日本全国で映画を撮っているのもそのためではないでしょうか。

その落ち着きのなさは、理想の“ふるさと”を体現する場所を探し続けていることに通じます。

渥美清が見事に演じた寅さんで一躍有名になった『男はつらいよ』シリーズは、それを奪われた監督の悔しさを最もよく表しているのではないでしょうか。

「全国行脚をやめない寅さんでも、いずれは生まれ故郷の東京・柴又に帰ってくる。そこで自分を待っている人がいることを知っているからだ」と言います。

例えば、『男はつらいよ 純情篇』（1971年）の冒頭で寅さんが、「どうせ気ままな旅鴉渡世と粋がってはおりますものの、わびしい独り旅の夜汽車の中のうたた寝に、ふと夢に見るのは故郷のこと、お笑いくださいまし、四十に手のとどくこの寅次郎は行きずりの旅の女の面影に、故郷に残した妹を思い出しては涙をこぼす意気地なしでございます」と言っています。

この言葉が印象に残っています。このセリフで何百万人が泣いたでしょう。わかりませんが、山田監督の哲学が集約されています。

作家の室生犀星が「ふるさとは遠きにありて思ふもの」という名文句で指摘したように、故郷との結びつきは必ずしも喜びの源泉とはなりません。しかし、「ある種のノスタルジーを感じずにはいられません」と山田監督が言います。私が好きな山田作品のひとつである『同胞』（1975年）では、この強く特別な絆を具体的に定義することに成功しました。

「この映画を見た若者が、ふるさとに暮らす父や母、兄や妹たちについて、深い想いを抱いてくれればと願う。そして、この映画を観た大人は失われた青春に強い懐かしさとあこがれを抱いてくれればと思う」と、演出の言葉で記しました。ここでは岩手県の中心部を舞台に、地元の青年団が「ふるさと」というタイトルの野心的な音楽ショーが開催される様子を描いています。

山田洋次がいかに執拗に「ふるさと」を定義しようとしているかは、他の例からもうかがい知ることができます。

2012年、月刊誌『東京人』のインタビューで、ついに柴又は「僕にとっても“故郷”です」と言い切りました。「撮影で足しげく柴又に通っているうち、いつしかここを自分の故郷みたいに思うようになっています」と。

しかし、心の底ではまだそれを見つけられていないのだろうと思います。

何度も豊中市に戻り、2020年には大阪を舞台にしたテレビ版『贋作 男はつらいよ』まで作っているのは、まだ探し続けているということではないでしょうか。作品によって、彼はその研究を観客に喜んでもらうことができたのだから、これからも、この道をずっとずっと続けていってほしいと思うのです。

クロード・ルブロンさん

山田洋次監督と豊中市政

前・豊中市市長　浅利敬一郎

教育文化都市・豊中

豊中市は、昭和11年の市政施行以来、まちづくりの基本に教育文化都市を位置づけ、学校教育の充実や地域主体の生涯学習の充実に積極的に取り組んできました。結果、多くの優秀な人材を輩出し、都市の魅力として輝いてきました。

一方、鉄道・道路・空港など交通の利便性の良さも住んでみたい街・住み続けたい街としてさまざまなメディアに取り上げられています。

平成18年の私の一期目の施政方針は、阪神淡路大震災以後の赤字体質の改善と財政再建を果たすことをめざしました。

二氏に名誉市民の称号を贈る

二期目・三期目の豊中市政の特徴は、

⑴豊中商工会議所と共に大阪国際空港を生かしたまちづくり（空港所在地との都市間交流）

⑵地域社会や日常生活における安心安全なまちづくり（救命力世界一宣言、自主防災組織の拡充と防災訓練の実施）

⑶大阪大学や大阪音楽大学、日本センチュリー交響楽団との共同事業の実施（音楽あふれるまち豊中）

⑷文化活動・スポーツ活動の充実と発展（高校野球発祥の地関連事業、文化芸術連盟との共同事業）

さらに、人口減少期を迎えることから、都市の魅力を発信するため、豊中市の恵まれた人材に焦点をあて、情報発信に力点を置くこととなり、

市政施行75周年記念として　南部陽一郎氏

市制施行80周年記念として　山田洋次氏

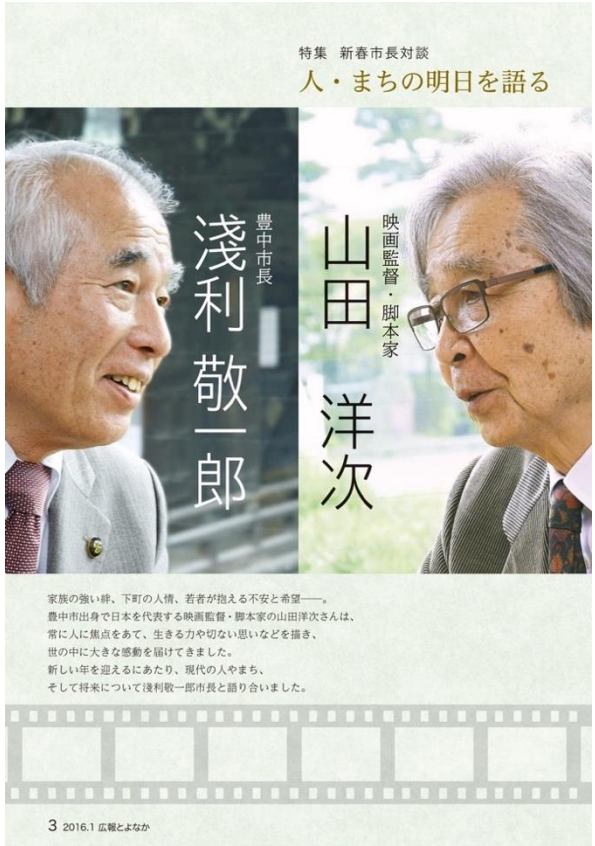
に名誉市民の称号を贈ることにいたしました。

山田監督については、昭和6年に大きな三角形の屋根のある生家（中桜塚）で誕生され、二歳まで生活されており、改めて成果を訪問されたときに、家の間取りや生活の一部について語られ、私などは五歳のときの記憶がおぼろげであり、監督の記憶力の凄さと感性に驚かされました。

「とよなか山田会」の皆さんのお力添えを頂き、映画と文化を考える集いを行ない、『家族はつらいよ　妻よ薔薇のように』を全国公開に先駆けて上映し、多くの市民の皆さんに楽しんで頂きました。

山田監督の思い出

私からは、平成28年の新春市長対談をお願いし、映画



「広報とよなか」 新春市長対談より(2016.1)

「男はつらいよ」の場面に出てくる葛飾柴又の「柴又帝釈天」の一室をお借りして対談することになりました。

約2時間にわたって、映画づくりの構想から展開など当時の映写機を通した制作をお伺いし、配役陣の個性や良さを感じさせる脚本についても聞かせて頂きました。

また家族を題材とした映画づくりについては、人と人とのぬくもりのある関係や、家族それぞれの側面など日常生活を通して、愛や人情の機微をカメラで追いながら撮影されたこと。また現代の映画製作との違いについても教えて頂きました。

一方で、プライベートについては、そばや肉を好んで食べられ、健康面での配慮や、秘書の方の肩に手を添えて歩かれるなど、矍鑠とした姿勢の中にも、安全面に気をつけておられるご様子を拝見しました。

昭和44年の「男はつらいよ」が大ヒット作となり、全48作のシリーズとして、他の追随を許さない日本映画の代表作となりました。

私の教員生活のスタートも昭和44年であり、教職員の親睦旅行や、所属していた体育指導委員のバス旅行では、毎回「男はつらいよ」のビデオ鑑賞していたことが、楽しい想い出として記憶に残っています。

観賞するものにとって、配役陣の演技力や笑いと涙、ユーモアのある映画として楽しむことができ、私達世代の多くのものが、心温まる映画として深く感動し、大ヒットしたものだと思います。

「わたしの柴又」

恋する乙女だった私。今では柴又のおばあちゃんを謳歌しています。

熊野裕子

私が初めて柴又を訪れたのは、五十年ほど前の七月。

なぜそんな昔のことを覚えているかというと、交際を始めたばかりのひとに誘われ、江戸川の花火大会を見に来た日だからです。

まさか、その後このまちにずっと住み続けることになるとは思いもよらず、三三五五人々の行き交う中、帝釈天の参道をそぞろ歩き、江戸川の土手に登り、今思えば、それはそれはのどかな花火大会を楽しみました。

そして、「葛飾柴又」が映画の中の架空の街ではなく、本当に実在する場所だったことを実感する日でもありました。

数年後、住みはじめてみると

義父は、雨の日も風の日も、毎日江戸川土手を散歩し、ロケ現場によく出合うらしくて、「今日は柴又駅で寅さんに会った」とか、「帝釈天でさくらさんに会いました」とか、日常に「男はつらいよ」のある日々が続くのでした。

こどもが生まれると、帝釈天の参道は、車が入らない絶好の散歩道になり、お団子屋さんの店先はちょうどよいお休み処でした。

ある花火大会の日は、花火終了後、突然の土砂降りに襲われて

参道にある民芸品店「志野木」さんの軒先に駆け込み、雨宿りをしていると、ご店主がこどもたちにバナナをくださいました。その後もよくして頂き、それはもう楽しい想い出となりました。

もう亡くなられたその方は、「男はつらいよ」の何作目かのマドンナのモデルと漏れ聞き、現実と映画の中をちょっと往き来した気分になったりしました。

二十年ほど前、使い古された風情のあった駅舎のベンチがひと晩で新しくなり、愕然とした日から、徐々に古い建物がシャしたものに変わりはじめました。

恋する乙女で、ヨソものだった私は

昔を懐かしみながら、今では、ご町内ではかなりの古株となり、また葛飾区内ならどこまでも自転車で駆け抜ける、柴又のおばあちゃんを謳歌しています。

この文章、思いがけず、四十歳になった子供たちの幼かった頃を想い出すきっかけとなり、私がどんなにしあわせな人生を、この柴又という街で生きてきたのかを想い出すことができました。

柴又風景

山田洋次NEWS

映画『こんにちは、母さん』
9月1日より全国公開

現代の下町を舞台に変わりゆく令和の時代。変わらない母の愛を描く親子の感動の物語。永野芽郁が演じるのは、下町で生きる多感な学生、神崎舞。おばあちゃん福江（吉永小百合）、父昭夫（大泉洋）と寄りそい、ぶつかり合いながら自らの将来を考え、深めていく。

妻の仇（かたき）を討つ。無明剣「武士の一分」

……過去の自分を乗り越え得た男の 静かな愛の物語

沢良木和生

藤沢周平の時代小説を原作にした山田監督の時代劇三部作は、いずれも雪深い東北の小藩でつつましく生きる下級武士たちの死と愛を描いた物語です。

中でも「武士の一分」は主役木村拓哉・檀れい・笹野高史の名優三名によって、まことに丁寧に描かれる「優しい愛妻物語であり、白刃閃く復讐譚でもありますが、この映画を通して、ぼくたちは江戸時代の地方の藩で静かに生きていた先祖たちの姿を、敬意を籠めて描きたいと思います」と山田監督が語る感動の大作です。

三十石という軽輩ながら剣の達人、三村新之丞は日頃藩主の毒味役を務めていますが、突然、貝毒に当たって失明。責任者の樋口作之助（小林稔侍）は切腹を命ぜられますが、新之丞の親族会議で、妻の加世は上役の番頭島田藤也にとりなしてもらうよう命じられ、結果、彼の家禄はそのままで養生を命ぜられます。

しかしそれは藩主の恩情によるものでした。島田はとりなしなどする男ではないにも拘わらず、家禄を餌に加世を騙して弄んだのです。加世の告白によってこれを知った新之丞は激怒し、深夜、帰る家のない孤児の彼女を無情に離縁放逐します。

以来、新之丞は「下級の武士でも、また盲目となった憐れまれる立場のものにも、武士の一分あり」と、新陰流免許を持つ島田に生死を越えて挑戦します。修練ではぶざまな打ち損じや覚束ない身ごなしを繰り返しながら、「必死、スナワチ生クルナリ」という剣の極意を極めていきます。

『武士の一分』(2006)

島田との決闘の場。島田は緒戦でただならぬ技を揮う新之丞に「おぬし、盲目ではないのか」と舐めていた相手の技に驚き、突如として気配を絶ちます。地上から馬柵上に逃げ移り、中空から飛び降りて斬る奇策をとったのです。ここで原作者藤沢周平は書きます。

「だが島村は逃げ出したのではなかった。やはり近くにいた。息苦しいほど濃密な殺気が、新之丞を包んでいる。新之丞はじっとりと冷や汗をかいた。

――この勝負負けたか。だが狼狽はすぐに静まった。勝つことがすべてではなかった。武士の一分が立てばそれでよい。敵はいずれ仕掛けて来るだろう。生死は問わず、そのときが勝負だった。

新之丞は暗黒の中にゆったりと身を沈めた。心を勝負から遠ざけ、生死から離した。一度は死のうとした身だと思ったとき、死も静かに心を離れていった。新之丞は暗黒と一体となった。凝然と佇（た）ちつづけた。

その重いものは虚空から降って来た。さながら天が落ちかかって来たかのようだった。新之丞は一歩しりぞきながら、無意識に虚空を斬っていた。左腕にかすかな痛みを感じると同時に、新之丞は島村の絶叫を聞いた。重いものが地に投げ出された音がつづいた。」

映画では原作と異なり、島田は上膊を斬られたまま家に帰りつき、盲目の新之丞に斬られたと、恥じてその名は告げ得ぬまま、これも武士の一分として自裁します。

何ごとも終わったあとの荒涼とした三村家。「可哀想な加世」と新之丞の内部で離縁した妻への想いが募ります。やがて中間の徳平の配慮で下女として雇われてきた加世。それが妻だと気づいた新之丞は彼女の手を取り、「よう帰ってきてくれたの」と切なく言葉をかけます。

自分のために犠牲となった彼女の仇を打ち、また死と向き合って無明剣を揮い、武士の一分を立てた新之丞は、ここで、これまでの自分をはっきりと乗り越えるのです。変わらぬ無明の世界ながら、新しい愛と誇りの、つつましい暮らしが改めて始まるのでした。「徳平、鳥籠を買おうかの」という何気ない言葉がとても象徴的でした。

編集後記

■しばらくお休みを頂いていた、「とよなか山田会ニュースレター」第６号をお届けします。

■本紙は、文化・芸術を愛するみなさんのゲンキなご発言の場です。特に豊中市名誉市民・映画監督山田洋次氏への感謝・激励・辛口批評など大歓迎。気軽でエンリョのないご投稿をお待ちしています。

編集部　〒561-0865　豊中市旭丘1-4-303

TEL　06-6843-6700

西井弘和

Mail　h-nishi77-100@ab.auone-net.jp